

中江藤樹の孝思想について

The Filial Piety Thought of Nakae Touzyu

邢 永 鳳*

Yong-feng Xing

(摘要)

中江藤樹は日本江戸時代前期の儒学家。他被称为日本阳明学之祖、近江圣人等。其思想对后世的日本影响很大。他的孝道思想也因其理论上的独特性和他的躬身践行，在日本孝道历史上绽放异彩。这主要是因为他把孝道理论由传统的伦理道德意义，拓展到了孝的本体论。其精神实质可以用“全孝”来加以概括。

孝道源于中国，是儒学思想的重要组成部分，孝道传入日本的过程即是《孝经》在日本的接受过程。本文通过藤樹对中国孝道思想的理解和接受过程中形成的独特的孝道理论做一梳理，并对其孝道实践者的一面进行论证。

关键词： 中江藤樹 全孝 本体论 实践孝道者

中江藤樹（1608-1648）は日本江戸前期の儒学家である。陽明学の祖だと言われた人物である。彼の思想は後の日本に深い影響を与えている。早くも江戸後期、中国の『二十四孝』と同じような教訓書『本朝孝子伝』に藤樹が致仕して家財道具を売って、母親を孝養することが誉められている。¹『本朝孝子伝』は寺子屋の教材でもある。『本朝孝子伝』、『近世畸人伝』などの修身教科書の影響で、藤樹の孝子像は後世人々の範となる。こういう日本の孝の歴史の中で、顕著な位置を占める模範的な孝子の思想は研究する価値があると考えられる。いままで、藤樹に関する研究はたくさんある²。しかし、これらの研究は、主に儒学者、

陽明学者の藤樹に集中したものであるが、孝思想、『孝経』の受容過程に形成された藤樹の孝思想という視点からの研究はまだ見られない。本研究は今まであまり重視されていない側面から、藤樹の孝思想について考察したい。

一 孝道の日本伝播

孝は中国で発生し、中国の家族制度の中で発展し、後に儒学の重要な一部分となり、現代まで伝わってきた。孝思想の形成は古代人の生死観念且つ家族制度と分けては考えられない。古代人間にとって克服できない生老病死の存在によって、原始の崇拜と靈的観念が

* 山東大学外国語学院 (School of Foreign Languages and Literature, Shandong University)

生み出された。特に死によって生者の魂と魄が、それぞれ天と地に向けて分離するとされている。こういう霊的な存在の観念が定着した時、祖先崇拜の観念も一般化されるようになった。この祖先崇拜の観念が最初の孝の観念であると加地氏が述べている。³古代では家族制度が発達し、それを維持するため、行孝と祭祖は一般的に行われていた。特に父母を現世生きている祖先と考え、行孝と祭祖とは柄は二つだが、精神は一つである。祭祖の格式が定着してから、次第に孝が体系化され、定着するようになった。その後、上述した宗教的性格の孝の観念は「君子儒」⁴の働きで、礼の枠に統括され、死の世界から生の世界へ広まっていった。即ち祖先崇拜から儒家文化の一部として統治者が人民を支配する道具のようなものに無意識のうちにかわりはじめる。その後、政治上の目的によって、孝治主義が広まった⁵。

一方、『孝経』とは孔子と曾子の談話の形を借りて作られ、天子、諸侯、卿大夫、士、庶人の孝を細説し、そして孝道の用を説く經典となる。『孝経』の成立は先秦時代まで遡れる。『孝経』の成立について、学界で定説はないが、概ね孔子説、孔子の門人説、子思説、曾子説、曾子の門人説、孟子の門人説、漢儒説などがある。

『孝経』は天子、諸侯、士大夫、庶人のそれぞれの孝を説き、君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信という五倫を説明し、孝道を自らの行動に貫くべき倫理道德だとする書物である。その中には、儒学の基本的な倫理観が貫いている。

日本の孝道は「舶来の物」⁶である。孝道が本格的に日本へ流伝したのは儒学が移入した後（5世紀以降）のことである。文献的に考察すると、最古のものは『魏志倭人伝』だとされ、魏の明帝から与えられた詔書の中で統

治者としての孝順の強調を明らかにしていた。そして、日本には17条憲法や『魏志倭人伝』の中の魏の明帝から与えられた詔書の中に、孝を表す言葉があったため、日本における『孝経』伝来がもうすでにその前に始まったのではないかという論調があったが、『孝経』の由来がただ語句の類似というより、本当に『孝経』の内容を理解し、受け入れ得るところの受け手が存在するかどうかが問題であると先学に疑われた。⁷そして、後の文献を考察し、『日本書紀』卷三の神武天皇詔には「大孝」の表現が『孝経』の孝の観念を踏まえて書かれただろうと推測された。後、大宝令(701年)の学令の中に『孝経』をいれること、孝謙天皇は757年に家ごとに『孝経』一本を蔵せよという詔が下り、これまで、孝は完全に律令文化の中に位置を占めるようになる。また、『経国集』⁸や『三教指帰』⁹は忠を第一、孝はその次であると主張しており、孝は学習から応用へ進んでいたことを窺わせる。さらに、平安期になる国家的な意味の君君臣臣の道德としての孝思想が見られる。鎌倉幕府のあとで、君臣の道德としての孝は武士層へ普及するようになる。そして、五山の僧の段階を経て、『孝経』は写本の時代から刊本の時代へ向かった。江戸時代になり、儒学の官学化によって、孝はかつてないほど提唱された。それで、孝は日本において理論上の昇華も見られた。そこに、中江藤樹が登場した。

以上で分かるように、「舶来の物」としての孝が本格的に日本へ移入したときはもうすでに『孝経』があったのである。日本の孝道の形成は『孝経』を受容する過程とも言えよう。同じく、中江藤樹の孝思想もその『孝経』の受容の過程と学問追究に従って成されたのである。

二 中江藤樹の孝思想の形成

中江藤樹は慶長13年（1608年）3月7日に近江国高島郡小川村（滋賀県高島市安曇川町上小川）に生まれた。藤の木の下で生まれ、藤樹の下で学を講じたため、藤樹先生また藤夫子と呼ばれた。

寛永11年（1634年）27歳で母への孝行と健康上の理由により、藩に辞職願いを提出したが、拒絶された。脱藩して京に潜伏の後、近江に戻った。そこで、私塾を開く。塾の名は、藤樹書院という。やがて朱子学に傾倒するが、次第に陽明学の影響を受け、格物致知論を究明するようになる。41歳、藤樹の下で卒した。藤樹は其の円満高潔な徳行を以って後代の文人に深い影響を与えていた

藤樹中江先生

良知倡教化頑氓。

淡海聖人不負名。

一孝修為百行本。

王門曾子是先生。¹⁰

というような詩文から後世の文人の藤樹への敬慕が伺える。

要するに、中江藤樹は其の孝行及び「致良知」の学問を以って、聖人の美名を後世に残している。藤樹の事跡は後人の模範となり、その聖人像を後世に輝かせた。

藤樹の孝の思想は主に『孝経』の触発から来た。それに加えて、藤樹自らの生活経験と学問探求によって、独自性を形成した。

藤樹は41年の短い人生で30年以上に渡って孝経の研究を続けた。川田氏本の年譜の記録によると、「先生十一歳、始読大学」¹¹という。だが、当時の入門書とされた『小学』と『孝経』はすでに十一歳の前に読んだはずだと諸研究者は推測している。即ち、九歳から書を学習し始め、十歳に『庭訓往来』、『貞永式目』¹²を

読む間に、『孝経』の学習をしたのである。『年譜』に藤樹が『孝経』を学習したことを明確的に記したのは、「九年癸亥¹³先生十六歳 是年通誦十三経」（『全集』五 P41）。十三経とは十三種の経書であり、いわゆる易・書・詩・周礼・儀礼・礼記・左伝・公羊・穀梁・論語・孝経・爾雅・孟子である。『孝経』はそのなかにある。十三経を通誦できるのは短時間でできないことであるゆえ、すでに『孝経』に触れたことが証明できる。

藤樹は14歳に祖母を亡くし、15歳に祖父を亡くした。毎日一緒に生活をしている実の父と母のような存在であったため、彼らの死去は藤樹にとってショックであったことはいうまでもない。年譜に「先生連遭大喪、哀痛形於色」（『全集』五 P31）と書いている。また、18で歳父吉次を亡くした。このように、次々に親を亡くす痛い経験によって、藤樹の孝に対する認識は深まったであろう。20歳のときの「夏用儒礼改葬祖父吉永」（『全集』五 P32）という行為には藤樹における『孝経』受容が窺われる。このような生活経験があったから、『孝経』への関心が深まり、藤樹の中年における『孝経考』¹⁴のような孝経に関する文献学的研究が完成した。

最初藤樹は朱子学の格法主義を厳守していたが、やがてあらゆる場面の行為の妥当性を厳しく求める朱子学の形式主義に疑いを抱くに至る。特に致仕後の藤樹は故郷に帰って、易に対する関心が出てきた。上京し、易学の師を求めた。しかし結局得られなかったため、小川に戻って独学した。このとき藤樹の学問の重心は四書から五経に移った。同時に易への研究が深まる一方、藤樹の心学傾向が見られるようになった。特に33歳のときには『性理會通』や『王竜溪語録』に接し、内面の心を重視して、外面の行動の妥当性を求めるようになった。中期の藤樹はとくに『孝経』受

容と独自の孝道理論の創出が著しい。

年譜に藤樹が31歳に「読孝経有感賦詩」と記す。詩の内容は以下のとおりである。

戊寅之鶏旦讀孝経偶成
心地収春當踐行。
於人細柳眼先青。
元為老和氣為子。
充塞両間惟孝経。¹⁵

この時期の藤樹は「充塞両間惟孝経」、即ち、『孝経』が天地万物の運転を支配すると考えた。彼は32歳に、『論語郷党啓蒙翼傳』を作成した。この著において、『論語』の「郷党」における孔子の言動を「郷党」、「宗廟・朝廷」、「威儀・衣服・飲食」という「時・処・位」に応じて行動することを「時中」の実例として捉え、そしてそれぞれの場面において作者は詳しく孔子の「言貌」の「迹」とその中に含まれる「心」はことごとく『孝経』に述べられる「愛」と「敬」を保っていることを力説した。ここでは藤樹が朱子学の格法主義を脱して、心学へ転向する傾向が読み取れる。このときの藤樹にとって、孝は「徳之本也。教之所由生也。又曰夫孝始於事親中于事君終于立身」（『全集』一 P265）であり、愛から発して「愛之極為敬」（『全集』一 P410）というふうに解釈した。

後、藤樹は毎朝『孝経』を読誦する。さらに太乙神を祭るようになった。これも心学に傾き人間の内面を反省した結果である。このときの著作に『翁問答』がある。『翁問答』は藤樹の第一傑作だと多くの研究者に評された¹⁶。この書物は天君と門人の体充の対話に托して、伊予の門人の請に応じ、孝道を人間の道と説いたものである。

文章の冒頭に体充の問いに托して、「われ人の身のうちに至徳要道といへる、天下無双の靈宝あり」（『全集』三 P64）というふうに人間一生涯のうち受用すべき道を至徳要道

であると捉えている。この至徳要道は廣大無辺で、至極神妙である。「この宝を用いて、心にまもり身におこなふ要領とする也。此宝は上天道に通じ、下四海にあきらかなるもの也。しかるゆへに、此たからをもちひて、五倫にまじはりぬれば、五倫みな和睦してうらみなし。神明につかふまつれば、神明納受したまふ。天下をおさむれば、国おさまり、家を齊れば家ととのをり、身におこなへば身おさまり、心にまもれば心あきらかなり。」「太虚、三才、宇宙、鬼神、造化、生死」（『全集』三 P64）ことごとくこの道によって行く。この宝は孝である。「元来名はなきものなれども、衆生におしへしめさんために、むかしの聖人その光景をかたどりて孝となづけたまふ」。、『全集』三 P64）また、孝をまなぶ学問を儒学といい、生まれながら孝を行うのが聖人であり、その代表が孔子である。また、孔子は後世の人々に孝を学ばせるために、『孝経』を作った。

孝の内容は愛と敬である。「愛はねんごろにしたしむころなり、敬は上をうやまひ下をかるしめあなどらざる儀なり。』（『全集』三 P64-65）それに加えて、「愛敬の至徳は通ぜざる所なし。』（『全集』三 P65）孝の愛敬は人倫においていうと、親への孝行を根本とし、さらに君臣、兄弟、夫婦、朋友まで押し広げて、孝を慈、忠、仁、悌、恵、順、和、信などの八種の「愛敬」となる。

孝を行う手段は「立身」と「行道」である。全孝心法¹⁷により、身をたて道を行う要は明德をあきらかにすることにあり、明德を明らかにするのは良知を鏡として独を慎むことにある。そこで、私心と人欲を取り去って、明德を明らかにするために、学問をするわけである。

人間に「五段の位」¹⁸（尊卑の差別）があるゆえ、「五等の孝」がある。天子、諸侯、卿大夫、

士、庶人の「孝徳は同一体なれども、位によりて、事の大小高下」がある。孝が海だとすれば、五等の位は器である。形は違うが、内容は同じである。昔、堯舜の理想時代では、聖人が天子の位につき、賢人が宰相の位につき、その次の賢人が卿大夫や士となり、愚痴不肖のものは農工商や庶人となる。素質の賢愚によって、人々は生まれながら、それぞれの「分」が与えられる。それぞれの分はそれぞれの位に応じ、それぞれの孝を行う。こうして、人間は分分相応して、社会秩序が確立できるし、人間の一生涯の道を行う。

ここでは、藤樹の孝に対する認識はすでに儒学の道德の枠を超え、天地人の三才、生死、宇宙、鬼神などことごとく包括して、太虚の万事万物が行う根本の原理だとされるようになった。特に、根本だとされた親孝行から押し広げて、太虚まで孝を基本的な原理とすることが設定された。それは所謂、藤樹の人間は太虚の分身変化であるという考えによるものである。藤樹は人間の外に天地があり、天地の外に太虚神明があると想定した。「我が身は父母の身をわけてうけ、父母の身は天地の気をわけてうけ、天地は太虚の気をわけてうけたるものなり」。(『全集』三 P66-7) それゆえ、人間は太虚の分身変化である。それに加えて、「人は天地の徳、万物の霊なる故に、人の心と身に孝の全体皆そなはりたる故により。身をたて道をおこなふを以て工夫のかなめとす。離身無孝、離孝無身」。(『全集』三 P66-7) 藤樹はこのような「分身変化」の考えに基づき、自らの身が太虚と繋がるようになった。こういうときの藤樹は既に孝を宇宙のエネルギーと生命力の根源としてとらえていた。

35歳の藤樹はもっぱら『孝経』を講じ、「愛敬」を掲げる。同じ年、『孝経啓蒙』を完成させた。『孝経啓蒙』は孝経に対する注釈書

である。『孝経啓蒙』においては、『翁問答』の趣旨を継承し、さらなる深化が見られる。孝が宇宙全体のエネルギーの根源であるという本体論は続いて説かれた。「夫孝天之経也。地之義也。民之行也。」「夫孝徳之本也。教之所由生也」孝は人倫の根本の理とし、仁智礼智信の五倫がそれを本とする。親孝行を基本だとし、その上に礼楽を加えるとする。また、孝を行う手段は「立身」・「行道」であると述べている。「立身」・「行道」については、「立身謂建五官之極而不廢其職分也。行道謂接物應事每脩道而須臾不離也。大學所謂格物致知是也。(『全集』一 P312)」と述べる。ここでいう「立身行道非兩事」は孝を行うの「体段」として、お互いに表裏を成している。つまり、自分に対しては立身といい、他人に接することに対しては行道といい。要するに「格物致知」の工夫としている。この考えが陽明学的傾向にあることはいうまでもないが、『孝経啓蒙』は『翁問答』より孝思想の深化があり、その宗教性が見られる。具体的に言えば、「嚴父莫大於配天」である。

『翁問答』において、神明信仰について、藤樹はこう書いている。「神明を信仰するは儒道の本意にて候。しかる故に、祖を天に配し父を上帝に配し、神明に通ずるを孝行の至極なりと孝経に説きたまへり。」(『大系』P141) 藤樹は神明を信仰することを儒教の本意とし、祖先を祭祀するのが至極の孝行として、孝行の観点から神明信仰を肯定している。

一方『孝経啓蒙』において、「子曰、天地之性、人為貴。人之行莫大於孝。孝莫大於嚴父。嚴父莫大於配天、則周公其人也」。(『全集』一 P339) 藤樹の考えによると、人間の身体髪膚は父母から受け、父母は始祖から受け、始祖は天地から生まれて、天地は太虚に帰する。それゆえ、人間の親はその父母であ

るが、根本的には天地であり、究極には太虚に想到するとしている。また、儒学の言い方を継承し、「人者天地之心、天地有人如腹内有心是也」。(『全集』一 P339) 人間と太虚は形而上の親子関係である。「身体髮膚受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。夫孝始於事親、中於事君、終於立身。」故に、親に対する孝行を人倫の基本だとし、太虚及び神明鬼神への祭祀までを想定できるとした。それがいわゆる「嚴父配天」である。父を尊ぶことは天に配することである。『孝経』に周公(文王の子、武王の弟、成王の叔父)はその始祖を天に配して祭る郊祀とその父を明堂に祭る宗祀を行ったと記載している。藤樹においても、父を尊ぶことは天に配し、大孝を行う範であるとする。藤樹のいわゆる「孝之全體雖充塞於太虚、而其實體備於人。而感而遂通天下之故、其感通之本在于嚴父。而嚴父之至通於神明、光於四海。無所不通。所以復充塞于大虚之本體」である。(『全集』一 P340) 故に、「嚴父配天」は人間と太虚との形而上の親子関係に基づき、自分の存在の根源への宗教的な自覚(藤樹のいわゆる「感通」)によって、天を祭ることである。

藤樹の晩年の孝思想を表したのが教訓書の『鑑草』である。『鑑草』は孝行を勸戒し、不孝の行道を戒める教訓書である。その主な内容は『迪吉録』から引用した事例であり、外が『三綱行実』と『古列女伝』などを根拠としている。¹⁹『鑑草』は序、卷の一、孝逆之報、卷の二、守節背夫報、卷の三、不嫉妬毒報、卷の四、教子報、卷の五、慈殘報、卷の六、淑睦報、廉貪報という構成である。その名の示すとおり、その主たる内容が因果応報と福善禍淫の例話をいくつか取り上げ、それぞれについて批評を加えている。

『鑑草』をめぐる、大いに議論されたの

はその仏教に融和的な発言である。この作品では、孝行を勧めるときに、因果応報・福善禍淫の怪異談を取り入れている。これは『翁問答』における著しい仏教批判とはまるで対立するような発言である。だが、高橋氏の研究によれば、『鑑草』と『翁問答』とは論証の方法に差異があるが、実に整合し得るものであるという。氏は『鑑草』の思想の核心は現世の自己の心において無常の真楽を獲得することを求める修養論であり、その立場は現世の人倫に対応し得る自己形成の修養を焦点とする儒教の立場であり、ただ仏教やそのほかの教説を包摂したり、排除したりする方法を取っているだけであると論じた。

以上で、中江藤樹の孝思想の形成史を回顧した。藤樹の孝思想は朱子学への疑問や思索と、陽明学への転向の表現ともいえよう。朱子学は四書を学問の中心とする儒学である。藤樹も幼いころから四書五経の順で学習してきた。格套に泥むことさえに行った。しかしながら藤樹は四書から回答を得ることができなかったため朱子学への疑問が起り、致仕後、五経の勉学へ転向した。特に致仕後は易に対する興味が深まる一方であった。易は占いの議を説き、神秘的なものである。易に傾倒した藤樹は漸く宗教的な信仰を持つようになった。藤樹の孝思想は朱子学からの離脱と陽明学への転向を基礎とし、心学を利用して人間と天地万物及び人間自身の有様を思索した結果である。

三 「明明徳」、「致良知」の孝行

ここでは明らかにしなければならない問題がある。それは「明明徳」、「致良知」と孝の三者の関係である。

藤樹によると、「上帝所以造化萬物者理与氣而已氣以成形而理以命性焉。以性言之則萬

物一原、固無人物貴賤之殊。所謂天命之謂性是也。然氣質之稟或不能無正通偏塞之異。是以得氣之偏且塞而為物者。」(『全集』一 P675) ここでの上帝は皇上帝であり、太虚の人格化したものである。天地の造化は理と氣からなるのである。理は万物の性となり、氣は万物の形となる。性を以ていえば、万物が同一で、人と物の毅然の区別がないわけであるが、氣質を以ていえば、万物それぞれの受け取りに差異があるため、人間と物の差別が出てくる。それは人間が万物の靈たるものなる故である。世間で聖人のみが生まれながら「天地合其徳、日月合其明」である。「大賢以下ノ資ハ氣質ノ濁駁ナキコトアタワズ。氣質ノ濁駁ニ拘蔽セラレテ明德ノ光明十分ニ洞徹ナラズ。故ニ俗習ニ汚染シ、人欲ニヒカレテ、種々意必固我日々ニソヒ年々ニ積リテ、道ヲ去コト漸ク遠シ。世間ノ苦痛モ此ヨリ集リ、天下ノ争鬪モ此ヨリ起ル。聖人コレヲ憂ルコトアリ。故ニ天下後世ニ学問ヲ教ヘ玉フ。是以学問ノ道無他。明德ヲ明ニスル而已矣」(『全集』二 18-19) 人間がその氣質の濁駁によって明德を通じない。意必固我の人欲が日々積み次第に道を去るのである。だから、学問をして、明德を明らかにし、心の本体の明德に返るのである。この学問は藤樹がいわゆる正真の学問たる儒学である。

そして、「明德者人之本心。天之所以與人而人之所得以靈於萬物者也。其體至虚至神、而具天地萬物之理。其作用至靈至妙而應天下之萬事。即人性之別名也。」(『全集』一 P675) 明德は人間の本心で、孝たる宇宙から受け取る理である。「明明徳」と「立身・行道」とは究極は孝を行う「工夫」である。

一方『翁問答』に「身をたてみちをおこなふ本は明德にあり、明德を明らかにする本は良知を鏡として独を慎にあり。良知とは赤子孩提の時より、その親を愛敬する最初一念を

根本として、善悪の分別是非を真実に弁へしる徳性の知を云。(中略) 大学の致知格物の工夫これなり。」(『全集』三 P369) という語がある。それに「孝経所謂愛親敬親者、孟子所謂良知良能者、明德之本真也。」(『全集』一 P200) 「明德」と「良知」はそれぞれ言い方が違う以外に、根本的孝たる太虚から分けられた至誠自然の理である。だから、「明明徳」と「致良知」はついに孝の本体に還る工夫である。

中江藤樹の一生涯を追究すると、藤樹は孝の理論家のみならず、実践者でもあった。若くして祖母、祖父、実の父が次々亡くなり、儒学の礼による喪礼の行いを通して、藤樹は孝を行うことを実感している。また、老母を憐れんで毅然として致仕帰郷し、母の孝養をするのも容易にはできない孝行であった。そのほか、中江藤樹は多くの作品を書き、孝思想を論述した。それは少年期の『首経考』、『孝経考』、致仕後の『翁問答』、『孝経啓蒙』と晩年の『鑑草』などである。特に有名なのは『翁問答』、『孝経啓蒙』である。これらの書物の影響で、藤樹の孝思想は長い歴史の中で大いに異彩を放っている。また、藤樹は実家の小川村において、藤樹書院を創立して学を講じる。学の内容は『大学』、『小学』などの以外に『孝経』を講じ、33歳から『孝経』を毎朝読誦していた。

葬礼での孝の実行、孝関係の著作の創作、『孝経』の講読という三つの行動は藤樹が一生涯を貫いて行ったものである。

おわりに

伝統孝道は親の孝行を根本とし、「君臣有義、父子有親、夫婦有別、長幼有序、朋友有信」(『全集』三 P75-100) の五典を説いてある。藤樹の孝思想は孝順を強調する一方、内面的

修養を強調している。いわゆる「尊徳性」である。藤樹によれば、自分の修養を高めることは父母を孝順する一端である。さらに、学問への進みに従って、性質の汚濁を除き、神明に通じることが「大孝」（『全集』— P192-3）以大體順親養親為大孝、以小題順親養親為小孝；孝經以嚴父配天為大孝；本體之明此之謂大孝）である。周公は「嚴父配天」たる「大孝」を行う範だとされている。伝統孝道は儒家の礼の範疇で説かれているが、藤樹の孝思想は孝の本体論を説いている。孝が宇宙の根源であり、一切の物の存在する根源とエネルギーだとされている。孝は天地万物の中で存在しており、終始不変の理である。人は学問（儒学）をして、明德を明らかにし、良知に至る終極の目的は孝を行うことにある。

こういう独創性のある孝思想の形成は伝統孝道と陽明学への受容が伴っている。藤樹の経歴からみると、二つの時期に分かれると思う。早期は27歳致仕するまでの時期で、孝經への受容を特徴とし、主に孝經関係の素読と現実生活の中で孝に対する体験を内容とする。後期は27歳以降の時期で、その心学への研究を深めつつ、独自の孝思想を創出するこ

とを特徴としており、後世に多く影響を与えた著作（『翁問答』、『孝經啓蒙』）の創作を内容としている。

藤樹の孝思想の形成は33歳に『翁問答』、35歳に『孝經啓蒙』の作成、33歳に太乙神信仰の開始と毎日孝經読誦を道標としている。この時期の藤樹は朱子学から動揺する時期である。実に朱子学「格法」の誤りへの反省は藤樹を五經研究へ導いた。同時に孝經研究を以って、朱子学の格法主義に反した。要するに、孝思想の形成は藤樹の大成するまでの思索である。

以上、藤樹の孝思想について分析した。要するに、中江藤樹の孝思想の形成は『孝經』の受容に繋がり、それに加えて、藤樹の生活経験と陽明学への転向が、思想上の独自性を見せるようになった。藤樹は孝の倫理性と宗教性を強調する一方、内面の内省と徳性の修養をも強調している。そして、親に対する孝行と、人を愛敬することと、自ら徳性の修養はすべて孝たる本体に還る工夫であった。「致良知」と「明明徳」の最終の標的は孝たる心の本体を明らかにすることであった。

注：

- ¹ 源了圓、前田勉、『先哲業談』、平凡社、東京、1994年2月10日、初版第一刷発行 P96
- ² 山本命、『中江藤樹の儒学——その形成史的研究』、風間書房、1977年；下程勇吉、『中江藤樹の人間学的研究』、広池学園出版部、1994年；木村光徳、『藤樹学の成立に関する研究』、風間書房、1977年などがある。
- ³ 山井湧ほか校注、『日本思想大系29 中江藤樹』（以下は『大系』と略する）、岩波書店、1974年7月25日第一刷、P411
- ⁴ 加地氏の話によると、「君子儒」とは上層シャーマンであり、最も代表的な人物が孔子である。下層シャーマン、即ち小人儒たちは依然として宗教的世界の中で生きていた。
山井湧ほか校注、『日本思想大系29 中江藤樹』、

岩波書店、1974年7月25日第一刷、P412

- ⁵ 桑原氏は自分の論述の中で、幾度も孝道が儒教の第一教義と強調した。適当かどうかはさておき、孝は儒学の理論においての重要性が窺える。『桑原隲蔵全集』第三巻、1968年4月23日、岩波書店、P15
- ⁶ 刘金才、『中日伦理价值取向比较』、人文杂志、1994年第1期、P9
原文：然而，“孝”这一观念，在日本并不像在中国那样是自身的社会形态和文化土壤自发生成的产物，而是从中国文化中引进的“舶来之物”。亦即说，“在儒家思想传入日本之前，日本人无‘孝’的观念”。
- ⁷ 山井湧ほか校注、『日本思想大系29 中江藤樹』、岩波書店、1974年7月25日第一刷、P417-428
- ⁸ 平安時代の勅撰漢詩集。20巻。日本で最初の詩

文総集。6巻が現存されている。

- ⁹ 787年に空海に書かれたもので、仏教、儒教、道教に関する論集であり、日本最初の比較思想論であり、仏教は三教の中で最善のものであると力説するものである。
- ¹⁰ 中江藤樹著、藤樹書院編、『藤樹先生全集』五、岩波書店、1940年増訂、P514
- ¹¹ 中江藤樹著、藤樹書院編、『藤樹先生全集』五、岩波書店、1940年増訂 P30
- ¹² 室町時代に編纂された書簡、文章の範例集であり、習字の教科書として、広く使われた。式目は鎌倉時代の法令集、近世で教科書として使われた。
- ¹³ 1623年、元和9年のことを指している。
- ¹⁴ 『孝経考』において、孝経の作者が孔子であることと、古文を斥けて今文に従うと藤樹は力説した。
- ¹⁵ 中江藤樹著、藤樹書院編、『藤樹先生全集』一、岩波書店、1940年増訂 P85
- ¹⁶ 下程勇吉：『翁問答』は藤樹哲学の全貌とその根本的特色とを示す体系的著作として、極めて重大なるものである。下程勇吉、『中江藤樹の人間学的研究』、広池学園出版部、1994年、P33
- ¹⁷ 藤樹が主張しているものであり、心学の影響が見られる孝の理論である。
- ¹⁸ 中江藤樹著、藤樹書院編、『藤樹先生全集』三、岩波書店、1940年増訂、P68
- ¹⁹ 高橋文博、『近世の死生観』、べりかん社、2006年5月26日、P215

参考文献：

- 中江藤樹著、藤樹書院編、『藤樹先生全集』、岩波書店、1940年
- 山井湧ほか校注、『日本思想大系29 中江藤樹』、岩波書店、1974年
- 渡辺武、『中江藤樹 人と思想45』、清水書院、東京、1976年
- 木村光徳、『藤樹学の成立に関する研究』、風間書房、1977年
- 山本命、『中江藤樹の儒学——その形成史的研究』、風間書房、1977年
- 山住正己、『中江藤樹 朝日評伝選17』、朝日新聞社、1977年10月
- 林秀一、『孝経』、明德出版社、1981年4月15日再版
- 源了圓、前田勉、『先哲業談』、平凡社、東京、1994年2月10日、
- 下程勇吉、『中江藤樹の人間学的研究』、広池学園出版部、1994年
- 高橋文博、『近世の心身論』、べりかん社、1996年
- 古川治、『中江藤樹の総合的研究』、べりかん社、1996年
- 島田虔次、『朱子学と陽明学』、岩波新書、1998年
- 池澤優、『「孝」思想の宗教学的的研究』、東京大学出版会、2002年
- 尾藤正英、『日本倫理思想史』、東京大学出版会、2004年